



# 何でも兼<sup>うお</sup>ツチング

No.71 『藻場の育成に向けて』

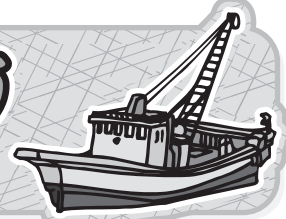


写真1 対象海域



写真2 駆除した植食動物の一部  
(左:オオコシダカガンガラ、右:キタムラサキウニ)

磯焼けによる藻場の衰退が全国的に問題になっています。本県状況をみると、全体的には磯焼け状態にはないと言えませんが、いまだ磯焼けが持続している箇所があります。そこで、水産試験場では、磯焼けした藻場の回復のため、平成15年～19年にかけて、いくつかの手法(母藻設置、植食動物除去、岩盤清掃など)の実証試験を行い、その有効性を確認しました。これらの技術は、最近始まった県内3ヶ所での藻場保全活動の中で使われています。先日、植食動物除去の現場に行ってきたので、レポートしたいと思います。

夏終わりの午後1時半、国道7号から磯場を下りる斜路に集まったのは、加茂水産高校の水産生物部の部員と顧問からなるウニ除去部隊、総勢10数名。うち9名は素潜りで水中眼鏡にシユノーケル、3名はボンベを担いだスキューバダイビングの格好です。海上では漁船2隻が潜水作業の安全を見守ります。その心配をよそに、部員たちは、次々と袋にいっぱいにしたウニや小型巻貝をカゴに移しては潜っていきます。岩の窪みに潜んでいるウニは、ヤスで刺して退治します。立ち会う漁業者の方々も、部員たちの素潜りのうまさに驚いています。この日の作業は午後3時に終了。ウニは、ほとんど

がキタムラサキウニで485個、小型巻貝はオオコシダカガンガラ(シタナミ)で220個が集まりました。(写真2)

漁業権魚種であるウニを除去しなければならぬ切実な理由は磯焼けによりアワビの資源が減少してしまったことにあります。この場所では、小波渡地区の磯見漁業者会が藻場保全活動組織を立ち上げ、アワビの餌となる海藻を増やす活動を開始しています。海藻が少ない状態が持続する要因の一つに、海藻を食べるウニなどの植食動物の影響があると水産試験場では考えています。つまり、何らかの要因で植食動物があまりにも増え、海藻の生残、生育が阻害されているのではないかとことです。特に、植食動物の代表格であるウニは、発生当初は石や岩盤の上の薄い膜のような藻類を食べているのですが、大きさが1cmを越える頃から海藻類を大量に食べるようになります。また、飢餓に強く、海藻が減っても成長不良のまま生き続けるので厄介です。オオコシダカガンガラは、ウニほど大食漢ではないのですが海藻の幼芽を食べる上、数も多いため、除去の対象となりました。

なお、今回、除去した植食動物は、加茂水産高校での実験材料として用いられるなど有効に利用されています。加茂水産高校水産生物部では、今後も同地区での除去作業を予定しているとのこと、藻場にとっては、頼もしい課外活動と言えます。

浅海増殖部 主任専門研究員 高澤 俊秀